

創塾35周年記念

第5回 須原英数教室教育講演会

平成26年3月30日（日）2：00

西武八尾 8階 パンケットルーム

基調講演

『私と英語と英語教育』

講師

大阪教育大学 英語教育講座 教授

加賀田 哲也 先生

プログラム

2 : 0 0 開会 司会 須原 きよみ

第一部

2 : 0 5 特別ご来賓挨拶 清風学園中学校高等学校 理事長 平岡 英信 先生

2 : 1 5 基調講演

題目『私と英語と英語教育』

講師：大阪教育大学 英語教育講座 教授 加賀田 哲也 先生

3 : 1 5 (休 憩)

第二部

3 : 2 0 ご来賓挨拶

・公益社団法人 全国学習塾協会 近畿支部 支部長
ホリエグループ 塾長 荒川 雅行 先生

・関西私塾教育連盟 理事長
伸学セミナー 塾長 清村 善治 先生

3 : 3 0 『塾教育』実践報告

須原英数教室 塾長 須原 秀和

3 : 4 5 ミニ教育講演

・清風学園中学校高等学校 校長 平岡 宏一 先生

・東大寺学園中学校高等学校 校長 矢和多 忠一 先生

・灘中学校高等学校 校長 和田 孫博 先生

4 : 1 5 (休 憩)

第三部

4 : 2 5 コーヒーブレイク

通学している学校の先生方と、生徒諸君・その保護者の皆様が楽しく談笑していただくひとときです。

5 : 2 0 終了予定

加賀田哲也 先生

プロフィール

アメリカ・シアトルにある州立ワシントン大学（理論言語学）および大学院（教育心理学）を修了した後、大阪大学人間科学研究科博士課程後期修了。博士（人間科学）。

大阪商業大学教授を経て、現在、大阪教育大学教育学部・英語教育講座教授。

目下、大学で教員養成に携わるほか、関西圏の小学校、中学校、高等学校を中心に英語授業改善のための指導や教員研修にあたっている。

研究領域：小学校外国語活動、小・中・高一貫の英語教育、人間教育としての外国語教育、**Humanistic Language Teaching**。

学会：

英語授業研究学会（理事）、日本児童英語教育学会（理事）、小学校英語教育学会（理事）、外国語教育メディア学会（運営委員）、大学英語教育学会、日本国際理解教育学会、など

主な著書：

『小学校英語教育法入門』（共著、教育出版）

『児童が創る課題解決型の外国語活動と英語教育の実践』（共著、高陵社出版）

『英語授業改善への提言：使える英語を目指す授業実践』（共著、教育出版）

『児童が生き生き動く英語活動の進め方』（共著、教育出版）

『これからの小学校英語教育—理論と実践』（共著、研究社出版）

『小学校英語教育の展開—よりよい英語活動への提言』（共著、研究社出版）

『TOEICテスト速解ナビゲータシリーズ（文法編）』（単著、三修社）

『英語のリスニング・ストラテジー：効果的な学び方の要点と演習』（共著、金星堂）

など多数。

ご出席者来賓名

学校関係（学校名アイウエオ順）

| | | | | |
|--------------------------------|--------------|-----|----|----|
| ・上宮中学校高等学校 | 前校長 入試対策部参事 | 土井 | 博史 | 先生 |
| ・大阪桐蔭中学校高等学校 | 校長 | 寺川 | 国仁 | 先生 |
| ・大阪府立八尾高等学校 | 校長 | 浅田 | 建 | 先生 |
| ・大阪府立八尾高等学校 | 主席 | 藤原 | 大 | 先生 |
| ・大谷中学校高等学校 | 高校教頭 | 雪矢 | 敏明 | 先生 |
| ・大谷中学校高等学校 | 中学教頭 | 永田 | 幸子 | 先生 |
| ・大谷中学校高等学校 | 入試対策部長 | 山西 | 京子 | 先生 |
| ・開明中学校高等学校 | 校長 | 早坂 | 元実 | 先生 |
| ・関西福祉大学金光藤蔭高等学校 | 校長 | 杉岡 | 俊男 | 先生 |
| ・近畿大学附属中学校高等学校 | 校長 | 岡崎 | 忠秀 | 先生 |
| ・近畿大学附属中学校高等学校 | 教頭補佐 | 森田 | 哲 | 先生 |
| ・興国学園高等学校 | 理事長 校長 | 草島 | 葉子 | 先生 |
| ・興国学園高等学校・立命館大学 大阪府立天王寺高等学校 | 非常勤講師 元校長 | 岡 | 毅 | 先生 |
| ・城星学園中学校高等学校 | 校長 | 宮脇 | 道子 | 先生 |
| ・城星学園中学校高等学校 | 入試広報室長 | 大川 | 浩子 | 先生 |
| ・清風学園中学校高等学校 | 理事長 | 平岡 | 英信 | 先生 |
| ・清風学園中学校高等学校 | 校長 | 平岡 | 宏一 | 先生 |
| ・清風学園中学校高等学校 | 主事代理 | 松永 | 惠一 | 先生 |
| ・高槻市立上牧小学校 | 教諭 | 和田 | 博之 | 先生 |
| ・東大寺学園中学校高等学校 | 校長 | 矢和多 | 忠一 | 先生 |
| ・灘中学校高等学校 | 校長 | 和田 | 孫博 | 先生 |
| ・浪速中学校高等学校 | 高校教頭 | 宮 | 照夫 | 先生 |
| ・西大和学園中学校高等学校 | 生徒募集部長 | 新保 | 久俊 | 先生 |

ご出席者来賓名

塾関係（塾名アイウエオ順）

| | | | | |
|--------------|---------|----|-----|----|
| ・がくあん | 代表 | 神尾 | 聡一郎 | 先生 |
| ・関西教育システム | 代表 | 岡山 | 和浩 | 先生 |
| ・学進舎Yセミナー | 渉外・広報部長 | 松田 | 元気 | 先生 |
| ・湖北総合学園 | 取締役 | 山崎 | 英子 | 先生 |
| ・俊英塾 | 代表 | 鳥枝 | 義則 | 先生 |
| ・ホリエグループ | 塾長 | 荒川 | 雅行 | 先生 |
| ・たちばな学習教室 | 代表 | 山本 | 良枝 | 先生 |
| ・たちばな学習教室 | 塾長 | 生藤 | 美紀枝 | 先生 |
| ・伸学セミナー | 塾長 | 清村 | 善治 | 先生 |
| ・株式会社教育企画湯口塾 | 代表 | 湯口 | 兼司 | 先生 |
| ・特化塾ヨシダゼミナール | 代表 | 吉田 | 良之 | 先生 |
| ・レーゼクライス | 代表 | 三谷 | 修司 | 先生 |
| ・レーゼクライス | 副代表 | 三谷 | 佐枝子 | 先生 |
| ・レーゼクライス | 英語科主任 | 山下 | 祐佳里 | 先生 |

出版関係等（会社名等アイウエオ順）

| | | | | |
|--------------------------|--------------|----|-----|----|
| ・株式会社朝日教育社 | 営業統轄リーダー | 辻 | 行平 | 様 |
| ・株式会社育伸社 | 大阪営業所所長 | 森川 | 悠司 | 様 |
| ・株式会社育伸社 | | 川津 | 忠彦 | 様 |
| ・株式会社五ツ木書房 | 代表取締役社長 | 岡本 | 不二男 | 様 |
| ・株式会社五ツ木書房 | 駿々堂テスト事業部部長 | 伏見 | 薫 | 様 |
| ・US I 企画 | | 臼井 | 充男 | 様 |
| ・大阪市立大学医学部附属病院呼吸器外科前期研究医 | | 原 | 幹太郎 | 先生 |
| ・株式会社教育事業社 | 営業部マネージャー | 宮川 | 真左美 | 様 |
| ・株式会社教育事業社 | | 治田 | 道子 | 様 |
| ・株式会社月刊私塾界 | 記者（取材） | 中古 | 光一 | 様 |
| ・服飾倶楽部 | 代表 | 中井 | 博重 | 様 |
| ・株式会社ルックデータ出版 | 塾ジャーナル記者（取材） | 道籟 | 明子 | 様 |

（3月20日 現在）

2013年9月14日（土）京都大学基礎物理学研究所湯川記念館パナソニック国際ホールにて、第8回国際教育学会公開シンポジウムが開催されました。テーマは『求められる教育・・・学力とモラル』でした。その中で、私は『塾教育』をテーマに発表する機会を与えられ、実践報告と今後の展望について述べました。一人15分という限られた時間ですので、資料を作成し配布いたしました。加賀田哲也先生には、お忙しい中ボランティアで翻訳をして下さいました。

その配布資料を、国際教育学会の機関紙『クオリティ・エデュケーション』に投稿いたしましたところ、『オピニオン』としての採用の可能性があるとのお返事をいただきました。その際、国際教育学会学会誌編集委員会委員長の同志社大学教授八木匡先生からは、大変ご親切なアドバイスや細部にいたるまでご指導を賜り、心より感謝しております。配布資料から各学校での講演会のアンケート調査や資料を取り除き、題名を『塾教育』から「『塾教育』の役割を考える」に改めました。また、文体も『である調』に変更しています。八木先生のご指摘通りの内容に仕上がっているかどうかわかりませんが、『塾教育』についてより深く考察できる機会を与えていただき嬉しく思っています。その私の拙い日本語をもとに、加賀田先生にはもう一度翻訳をお願いいたしました。現在、再投稿中です。

私が国際教育学会で発表しました動機は本文の中で述べており、2013年9月22日の東京市ヶ谷での記念講演では、そのこととお話いたしました。巻末に紹介しております『進学塾という選択』の著者おおたとしまさ氏は『当初中学受験批判を目的として始められた「乱塾キャンペーン」は高校受験塾までを巻き込み「塾＝悪」という価値観を社会的に刷りこむことには成功したものの、不思議なことに塾業界はその後も拡大した。……かくして日本は、スポーツに打ちこむ子どもは子どもらしくてよろしいと褒められるのに、勉強に打ち込む子どもはかわいそうと同情される社会になってしまった。』と書いておられます。また、『乱塾』という言葉が新聞各紙の紙面を飾り、塾および子どもを塾に通わせる親に対するバッシングが盛んに行われたと、おおた氏は語っておられます（P.16～）。ですから『必要悪』というネガティブなイメージが塾には付いてまわるのでしょう。

こうしたことは日本国内ではわかる人にはわかってもらえるでしょうし、自ら塾を作り10年も運営した経験を持つ方が文部科学大臣をされている今の世の中になって、これからますます塾の社会的存在意義は変わってくると思います。しかし、外国の人々には誤解されたままでは困ります。塾には別の側面もあることを私は認識していただきたいと思い、そこで翻訳していただいた英文の方を学会誌には投稿・申請しています。加賀田先生にはご無理をお願いし『共著』という形にさせていただいています。そもそも『塾教育』を regular school education（学校教育）に対比し、jiku school education と翻訳して下さいしたのは加賀田先生でした。申請通り学会の方で受け止めていただけるかどうかわかりませんが、先生には本当にお世話になりました。感謝の念に堪えません。

ここ2年ほどの『塾教育』実践の経過と、『塾教育』の役割を考える」の原稿の日本語と英文を掲載いたします。国際教育学会の方にはその旨をお知らせしております。

3月15日（土）国際教育学会学会誌編集委員会委員長の八木匡先生よりメールをいただきました。この冊子への原稿掲載のお許しとともに、英文原稿が『Quality Education』に『掲載予定』と書かれてありました。大変嬉しく思いますとともに、講演会の成功を願う旨のメッセージまでいただき感謝しています。ありがとうございました。

最近の『塾教育』の実践

- ・ 2013. 12. 25. 同窓会館
大阪府立八尾高校 1・2年生勉強合宿 進学講演会
- ・ 2013. 11. 7. 近畿大学本館ホール
近畿大学付属高校文理コース2年生生徒・保護者対象
教育講演『大学受験に向けての心構えと学習方法について』
- ・ 2013. 9. 22. アルカディア市ヶ谷 私学会館
『教育ネット要覧（第13集）』出版祝賀会
第1部 記念講演 須原秀和 『塾教育』
第2部 基調講演 下村博文文部科学大臣
- ・ 2013. 9. 14. 京都大学 基礎物理学研究所 湯川記念館
国際教育学会 第8回 公開シンポジウム
テーマ：『求められる教育…学力とモラル』
『塾教育』について発表
- ・ 2013. 4. 16. 南港 大阪アルカディア
大阪府立八尾高校 新入生宿泊研修 進学講演会
- ・ 2012. 12. 25. 同窓会館
大阪府立八尾高校 1・2年生勉強合宿 進学講演会
- ・ 2012. 9. 3. 浪速学園中学校高等学校 視聴覚室
全教員対象
教育講演『主体的学習への動機づけと信頼関係の構築』
- ・ 2012. 7. 4. 金光八尾中学校高等学校 応接室
管理職・運営委員会・主任等の先生方対象
教育講演『須原秀和先生を招いての学習会—大学入試対策』
- ・ 2012. 5. 24. 大阪府立八尾高校 校長室
公開初任者研修 教育講演



『塾教育』実践の場として、講演の機会を与えていただいた各学校の先生方には厚くお礼を申し上げます。春以降も生徒・保護者対象の講演を予定していただけている学校もあり、嬉しく思っています。また、学校の先生方と昼食を一緒に取りながら教育について語り合う定例会（私は『教育食談会』と呼んでいます）も行っていますが、私にとりまして大変有意義なひとときです。『校塾連携』に、これからもお役に立てるように微力を尽くします。学校の先生方には、どうぞより一層のご協力をお願いしたいと思います。

『塾教育』の役割を考える

要旨

私は、講師を雇わず妻と二人だけで小さな個人塾を開いて35年目を迎えている。

個人塾では、単に学習指導の面において『教』えることばかりでなく、子どもを『育』てることにおいても努力を注いでいるところが多い。私はそれを『塾教育』(Juku School Education)と呼んでいる。

それは、本来家庭教育が担う躰や言葉遣いなどの生活指導をするばかりでなく、親の言うことには耳を傾けない反抗期の子どもでも、保護者と生徒の両方に信頼関係がある個人塾の先生に対してはその話を素直に聞き入れ、親子関係がスムーズになることにも貢献している。家庭教育における子育てには、親と子の当事者だけでなく『第三者』の存在が必要であり、『塾教育』がそれを果たし得る。

学校教育においても、先生と生徒の間に『第三者』としての存在があれば、勉強への動機付けがより容易に出来、学校の先生と生徒との間の信頼関係がより深まり、生徒諸君を学校の授業により集中させることが出来る。この考えの下に、学校教育における『第三者』としての役割を『塾教育』の実践として行ってきた。大阪府立八尾高等学校初任者研修・私立金光八尾中学校・高等学校や私立浪速中学校・高等学校における先生対象の教育講演、大阪府立八尾高等学校1・2年生対象勉強合宿や新入生宿泊研修における進学講演、近畿大学付属高校文理コースの生徒・保護者対象の教育講演等はその一例だ。熱意のある学校の先生と塾の教師の定期的な『教育研究』の場も、学校教育と塾教育とに相乗効果を発揮し、学校の先生と塾の教師との対等な立場における連携が予想以上の成果を出している。『塾教育』(Juku School Education)という言葉が第4の教育カテゴリーとして、社会的認知への第一歩になってもらえればと考えている。

1. 『塾教育』概念の出発点

『教育とは教えることばかりでなく、生徒を育てることもしなければならない。教師とは教えることばかりでなく、師として尊敬されなければならない。』京都知恩院ご住職から平成25年5月、11年ぶりに上宮学園の理事長として戻って来られた安井良道先生のお言葉である。十数年前に安井先生が校長先生をされているときにお聞きした言葉だが、私はその時以来心に留めるととともに、それまでの二十数年間塾生を指導してきたことに対して大きな支柱を得た思いだった。なぜならば、1979年創塾以来、講師を雇わず妻と二人だけで指導し、『教』えることばかりでなく『育』てることにも心を注いでいたと思えるからである。

個人塾の中には私と同じような気持ちや信念を持ち、指導しておられるところが多いはずだ。どうしてこれを『塾教育』と呼べないのか、これが出発点だった。

○塾とは

わが子が将来人間らしく生活できるために、親がその子に家庭内で言葉・社会モラル・生活習慣・知識や知恵・コミュニケーション・勉強などを教えることが家庭教育である。いわゆる『躰』と言い換えてもいいかも知れない。学校の授業についていけない子に対し、あるいは学校の授業内容の理解を深めさせたい場合や、更にはわが子によりレベルの高い内容を身に付けさせたい時など、親は自分が指導するよりは家庭教師や近くの塾にその指導を委ねる場合が多い。ベビーブームの『受験戦争』の頃には、よりレベルの高い進学校を目指すために通塾させる親も多かったと思う。また『ゆとり教育』は、それに不安を覚えた高学歴の保護者に塾の指導へ信頼を置くことに拍車をかけたと考えられる。こうして塾は家庭教育における学習面での補完という形で生まれきて、それが実績を積み上げ社会で認知され、今ではなくてはならない存在になってきたのだと考えている。『塾』の存在がなければ、もっと悲惨な学力低下を招いていたであろうということは、容易に想像がつく。規模や形態において様々な塾が存在する中で、その最大公約数的なものは何か、学校教育と一線を画するものは何か。それは『学習指導要領に直接縛られることがないこと』である。塾の指導方針は塾自らが決め、保護者や生徒の方で自分の考えに合った塾を選択できる。気に入らなければすぐに退塾することも可能であり、この点も学校とは大いに異なる。

6年間一貫教育の私立進学校に合格したいと思えば、塾で受験勉強をしなくてはまず合格は不可能である。なぜならば入学試験問題は小学校の授業の学習だけで解ける範囲とレベルをはるかに超えているからだ。またそれらの私立中学校では、最初の2年間で公立中学校3年分を学ぶことになる。英語の教科書一つをとってみても、公立中学校で使っているものより3倍は単語数も英文の量も多い。指導者の力量によっては指導要領の範囲外の学習内容を、あるいは範囲内であってもずっとレベルの高い学習内容の指導が可能であり、それをしたからと言って保護者から文句が出ることはない。むしろ優秀な子に必要な塾として歓迎される。

逆に、画一的な指導になりやすい『学校教育』に対して、授業についていけない能力的にみて力のいる生徒には、『個別的に』時間をかけてその子に合ったレベルで繰り返し指導できることも、個人塾の優れた面である。更にまた、生徒自身は真面目に授業を受けたくても、『授業崩壊』や『学級崩壊』によってまともに勉強できない環境が、公立中学校・公立小学校には時として存在する。勉強したいと思う子に学習の場を提供できるのも塾の存在意義があるところだと考える。このように指導要領に縛られない自由がある一方で、保護者や社会のニーズによって自然に淘汰されるのも塾である。

○『家庭教育』と『塾教育』

塾、特に個人塾は、教え子の家庭との結びつきが学校のそれよりは一般的により親密である。学習面の指導ばかりでなく、子どもの躰や生活面あるいは進路などで、生徒諸君や保護者の相談にのり、アドバイスをする場合も日常的に多いからだ。塾でそれを指導することを、当然だと期待する保護者も増えている。学校でも学期ごとに個人懇談会があり、進路の相談や勉強の仕方について生徒にアドバイスをするなどやっている。しかし、『下駄箱PTA』という言葉が示すように、一般的に保護者は学校の先生に対して面と向かっては中々本音を話さない。担任や教科担当の教師が、わが子に対してどう接するかを気にするからである。まして内申書の存在があれば尚更のことである。塾は簡単にやめることができるが、学校をやめるには保護者も生徒もかなりのエネルギーと勇気が必要となる。塾からすれば退塾者が出ることは塾の存続にかかわる問題であるから、生徒や保護者に対して親身になって話を聞くように努力する。進路指導においてもデータ等の信頼できる資料の正確さと豊富さは学校を圧倒している。学校も塾も同じことをやっけていても、その質と量において、塾の方に保護者は信頼を置いていると言えよう。

長引く不況や増加する離婚によって、パートなどに出る母親が増え、家庭内における教育力が落ちてきてい

る。育児や教育に自信を失い極端な場合には、子供に対する虐待すら起こっている。

少年非行を研究されている清永賢二先生は、『求められる子どもを「市民」にする教育』という中で、教育力がない家庭なら変にぐれた親よりも立派な先生とか、立派な地域社会とかに子どもを預けた方がいいのではないかと西村和雄先生に話しておられる。(西村和雄編『学力の土台』勁草書房 P.66) そこに表現されている代理親業とまでは言わないまでも、現在その一役を担っているのは個人塾だと私は考えている。単に塾で子どもを教えると言うことだけにとどまらず、『家庭教育』に占める塾の存在は大きくなっており、『塾教育』と『家庭教育』には密接な関係が出来ているのだ。

反抗期を迎えている中学生や高校生は親の言うことに、中々素直に耳を傾けようとはしない。『核家族』化により同居の年寄りがいなくなり、近所や地域とのつながりも希薄になり、『家庭教育』においては親と子の当事者だけになっているところが多い現実がある。しかし、子育てには当事者間の潤滑油となる『第三者』の存在が必要なのだ。家庭教育における『第三者』の存在を塾、特に個人塾が担えることは、これまでの保護者や生徒諸君との触れ合いの中で、『塾教育』の成果としてその実効性をどの個人塾でも経験済みで、確認できていることだ。ただ私は、保護者を塾任せにさせるのではなく、塾は保護者とともに子どもを育てるという意識が大切だと考えている。『家庭教育』との連携があれば『塾教育』はその機能をより発揮できるからだ。個人塾と深い信頼関係を築けた保護者は、卒塾後も進路・就職・結婚等といった相談に来塾する場合もある。このように現在では、家庭と塾との結びつきは非常に親密になっているが、それは塾が『育』てることにも力を入れてきたからに他ならない。

○『学校教育』と『塾教育』

映画『二十四の瞳』が描いている戦前の師弟関係にまで戻らなくとも、戦後の昭和中頃の学校教育においても、先生と生徒・保護者の関係は現在よりもはるかに親密で、生徒も保護者も先生に対して尊敬と信頼を置いていた。『学校の先生に言いつけるよ!』と親に言われれば、たいいていの子は親の言うことに従ったものである。そこには『聖職』としての教師像があったからだと思う。

しかし、現在では公立校では5年から7年くらいで先生は学校を転勤し、母校を訪れても恩師の姿はそこにはない。私立校でも生徒が急に増えマンモス化した学校では非常勤講師や人材派遣から送られてきた教師が授業をしている。これでは教師に愛校心を求めることは難しいし、『聖職』としての教師像が薄れてきても仕方がないことである。学校の教育力が低下してきているのだ。

和田中学校の元民間校長藤原和博先生は、東京大学の荻谷剛彦教授との対談で、『本好きのおばちゃんに図書室に来て貰ったら、読書好きの子が集うのではなくて、居場所がない子が集まるということがありました。おばちゃんが相談相手になってね。図書館がいわば第二の保健室になったのは、最初から期待したことではなかったんですよ。…「ドテラ」(土曜寺子屋)のお兄ちゃん・お姉ちゃんたちは宿題を教えているわけだけど、休み時間に自分の経験を話したりすることのほうが、よっぽど子どもと社会をつなげることに利いてくる。』(岩波ブックレットNo.738 杉並区立「和田中」の学校改革 P.98) と話しておられますが、上述のように昔は学校の先生が、あるいは近所のおじちゃんおばちゃんが、ここに登場する図書館のおばちゃんであり、ドテラの兄ちゃん姉ちゃんだったのだ。このようなことは現在の公立中学校における『学校教育』現場では珍しい事なのかも知れないが、個人塾の現場では日常茶飯事であり、どこの塾でも程度の差こそあれ、実践されていることだ。どうしてこれを『塾教育』と呼べないのだろうか。

現在では、学習塾の講師が公立学校の授業に参画し公教育の補完をする形で連携するところまで進んで来ている。これも『塾教育』の一面だが、私は更に進んで学校と塾との垣根を取り除き、学校の先生と塾の先生とが互いの偏見を捨て、『補完』ではなく『対等の立場』で連携し合う『塾教育』を考え、実践している。

○『社会教育』と『塾教育』

大変広い範囲で社会教育をとらえれば、家庭教育も学校教育も社会教育の一つとしてとらえることもできる。しかし、一般的には家庭教育と学校教育を除いたものを社会教育としてとらえ、しかも現在では『生涯学習教育』としてとらえているのがより一般的だと思う。ただ、私は、塾教育の対象が園児から大学受験生までであることを考えると、ここでは社会教育もその年代に関連した狭義のものとして限定的にとらえたいと考えている。例えば、子供会活動や地域のお祭りなどのイベントや近所付き合いあるいはボランティア活動などといった地域での教育活動を念頭に置いている。したがって地域社会教育と言い換えてもいいかもしれない。

現在も町会や各地域の団体があり、学校の運動場を利用した市民スポーツ祭やお祭りも行われている。しかし、ドーナツ化現象により、郊外に住居を求め新興住宅地やマンションに住む新住民と、以前から住んでいる地元住民との結びつきは、それ以前の地元住民だけの地域社会の頃と比べて、結びつきや団結力は希薄になっているように思われる。昔は小規模ながらいたるところに盆踊りがあり、隣近所のおじさんおばさんがよその子もわが子同然のように面倒を見てくれる環境があった。今は『隣は何する人ぞ』で、他人のことに口出ししない方が無難な世の中である。少子化の影響で市民スポーツ祭にメンバーを集めるのが大変であったり、子供会の存続が危ぶまれているところもあるのが地域の現状である。

こうした状況において、塾生が地域の清掃活動に参加したり、餅つき大会で作ったお餅を近所のお年寄りに配ったりして、地域に溶け込もうと努力している個人塾もある。個人塾の塾長たちが『町の教育家』として地域社会の教育について相談を受けるなど、今後は社会教育との関連においてもその結びつきを深める可能性が高いと考えている。

2. 第4の教育カテゴリーとしての『塾教育』

学校教育においても塾、特に個人塾がその『第三者』になり得る、むしろなるべきだと言うことを私は主張したい。『家庭教育』ばかりでなく『学校教育』においても、先生と生徒の当事者だけではなく『第三者』の存在があれば、生徒諸君に勉強への動機付けが容易になり、学校の先生と生徒諸君との信頼関係をより深いものに成し得ることから、生徒諸君が学校の授業により集中するようになるはずだ、これが私の考えだからだ。なぜ勉強への動機づけが容易になり、学校の先生と生徒・保護者との関係により信頼関係が深まるのか。

ある府立高校で1・2年生対象に教育講演をした。入学時と卒業時との学力の推移や大学進学への正確なデータを示し、具体的な勉強方法を提示し、自信を持つように生徒に語った。講演を聞いた生徒自身に表れたその効果と反響の大きさに驚かれて、2週間後校長先生が来訪された。『私も須原先生と同じようなことを何度も生徒諸君には話しているんですけど…』と、勉強意欲を持った生徒が増えたことに、大変嬉しそうに心境を述べられた。

私は校長先生のこの言葉がすべてを物語っていると考えている。普段から校長先生や学校の先生が同じ内容を生徒諸君に話しておられるからこそ、改めて『第三者』の私が話すことによってその話の信頼性が増し、生徒が学校の先生方への信頼をより深めることになるからだ。また授業やホームルーム活動など日常の学校生活からは得ることの少ない、現実的・具体的・実践的な学習方法や進路に関する話題が、塾の先生からの示される正確で豊富なデータによって説得力を持ち、生徒諸君はより確かな目的意識を持つことが可能になり、学習に取り組みやすくなる。『自分もやればできる、やってみよう』という動機づけができ、学校の授業にも集中することになるのだ。訪問の折、持参された生徒の感想文やアンケート調査等によれば、私が考えていたこと

が予想以上に正しかったことを裏付けてくれている。

更に、学校の先生は他校の実情やよその学校の生徒の様子などあまりご存じない。生徒にしてもよその学校の様子をほとんど知らない。しかし、塾の教師は学校主催の塾長対象の説明会や入試相談会などを通じて、数多くの学校と関係があり、個人的にも学校の先生と親しい付き合いもある。さまざまな学校に通う教え子やその保護者からの情報も豊富だ。したがって、学校での講演会や定期的にもたらされる学校の先生との教育研究会において、塾の教師の話は学校の先生や生徒に対して客観的な情報を提供できることになる。閉鎖的になりがちな学校現場に新鮮な風を送ることができるのだ。そればかりか、教育に熱意を持った学校の先生と塾の教師が語り合う『教育研究会』は、学校の先生ばかりではなく塾教師にとっても、塾生の学習指導の面において大いにプラスになることを実感している。まさに学校教育と塾教育の相乗効果だと思う。

○学校と塾との垣根を取り除き…

私の教室では生徒諸君に『学校の授業』と『自分の勉強』を大切にさせ、その『自分の勉強』を学習面ばかりでなく精神面においても生徒諸君を支えていこうと考えて指導している。創塾以来この姿勢は変わらない。創塾当初より、謄写版で刷ったわら半紙2枚くらいの『教室だより』を2ヶ月に一度くらい保護者に配布し、教室での塾生の様子を伝えていた。今では1年に一度くらいになったが、40～60ページのカラー写真入りの小冊子になっている。塾内の様子ばかりではなく、『国語力の大切さ』『PISA型教育への警鐘』『一流に触れること』などといったタイムリーな話題について私見を述べ、教育について語った情報機関誌的な様相を呈している。保護者ばかりではなく、卒塾生・塾の先生方・学校の先生方・出版関係者など500部以上を配布するまでになり、まもなく第130号を迎えようとしている。特に学校の先生方には好評を得ており、『教室だより』をきっかけに個人的に学校の先生と親しくお付き合いをしていただく機会に恵まれることも多い。

塾生の中にも学業不振に陥った子や停学処分などを受け横道に外れかけていた子もいた。その子たちが通う学校に、親しい付き合いをしている先生がおられるときはありがたい。連絡を緊密にとり連携して指導に当たることにより、そのような生徒ももう一度自分を取り戻し勉強に興味を示すようになる。彼らは希望する大学に進学を果たし、生徒本人もその保護者も学校の先生もそして私もみんなが笑顔でよい結果を迎えることができる。学校と塾との垣根を取り除き、学校の先生と塾の教師とが互いの偏見をなくして、『対等の立場』で手を携えて生徒の指導に当たれば、このような素晴らしい結果が現に生まれているのだ。ここにも『個人塾の教育力』が存在している。

『家庭教育』『学校教育』『社会教育』を、色の三原色を表す三つの輪に例えモデル化した図を考えるとわかりやすいかも知れない。これまで述べてきているように、三つの教育カテゴリは重なり合って機能していた部分もあったように思われる。しかし、核家族化・女性の社会進出・学校の先生と同等かそれを上回る保護者の高学歴化等といった社会現象により、更には前述のように家庭教育における親の教育力そのものも学校教育における教師の教育力そのものも低下したために、輪そのものが小さくなり、分離しているか重なりが少なくなって来ている印象を私は持っている。『塾教育』は塾内で行っている教育活動は言うに及ばず、家庭教育や学校教育との連携において『第三者』として教育活動に参加することによって、家庭教育や学校教育をより円滑にそしてより成果あるものにすることに貢献できるのだ。学力低下と社会モラルの低下を食い止める切り札に成り得るのではないかと期待している。『塾教育』という四つ目の教育カテゴリの輪を考えて、従来の三つの輪と有機的に重なり合っていると考えるべきなのだ。現在の塾、特に『個人塾』にはその役割が求められていると考えられるし、私は自分の実践を通じてそうあるべきだと痛感している。

『塾教育』が機能する領域とその模式図

『塾教育』が機能する領域

1. 塾内における教育
2. 『家庭教育』における保護者との連携
3. 『学校教育』における連携＝二つの側面

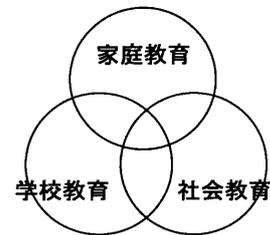
・ 個としての側面

学校の先生と連携した塾生の指導

・ 全体としての側面

講演活動などを通じた先生・生徒全体に対する指導

- かつては家庭教育・学校教育・社会教育が、
重なり合って機能していたと考えられる。



家庭教育:わが子が将来人間らしく生活できるように

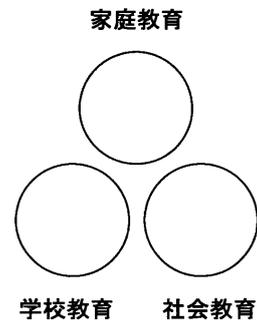
親が子に家庭内で教える教育

学校教育:教師が生徒に学校内で教える教育

社会教育:ここでは狭義にとらえ、地域社会において

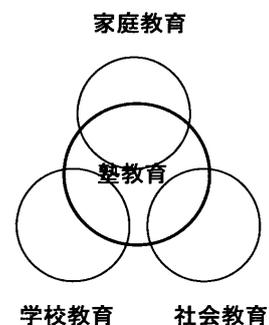
大人が子供に教える教育

以上のように私は各教育を定義づけている。



- 核家族化・女性の社会進出・保護者の高学歴化
といった社会現象により、家庭教育・学校教育・
社会教育の各教育力が弱まり連携も希薄になり、
輪が小さくなったり離れたりしていると思える。

- 『塾教育』は、塾内での教育活動は言うまでもなく、
『家庭教育』における保護者との連携で、また『学校
教育』との関連においては先生方と手を携えて、いず
れも『第三者』としての立場から、それぞれの教育を
円滑に進める社会的機能を有し、果たせるのである。
従来から存在する三つの輪を有機的に連結できる存在
であり、『塾教育』は第4の教育カテゴリーとして考え
られるべきものである。



3. 『塾教育』の今後の展望

2013年6月10日に発刊された『私塾・私学・企業 教育ネット要覧（第13集）』の巻頭言で、下村博文文部科学大臣は『…平成11年中教審6月答申の折、「文部省が塾容認」（読売）・「文部省塾と共存へ」（朝日）等と各新聞紙上で報道されました…』と触れておられる。当時の文部省が、事実を追認した形とはいえ、塾を認知したのだ。更に、同年4月、唯一の公認塾団体である全国学習塾協会が社団法人から公益社団法人へ移行したが、6月9日（日）の移行記念式典での講演で、下村文部科学大臣は『…立派な塾や私学が、勉強を教えているだけではなく、しっかりと躰やマナーやルールをきちっと教えているということは業界の中では当然のことですが、一般的には塾でそういうことを教えていると思っっている方は少ない。勉強を通じて人間としての道徳教育をきちっとしていることを公益社団法人がアピールしていただければと思います。…あそこの塾へ行ったら規範意識、普段の行動までしっかりしてきたというように、是非ご協力いただければと思います。』と述べておられる。家庭教育の補完という形で誕生した塾も、現在では教育制度の中で果たす公的な役割が増大し、社会の中でますます重要な存在になってきているのだ。

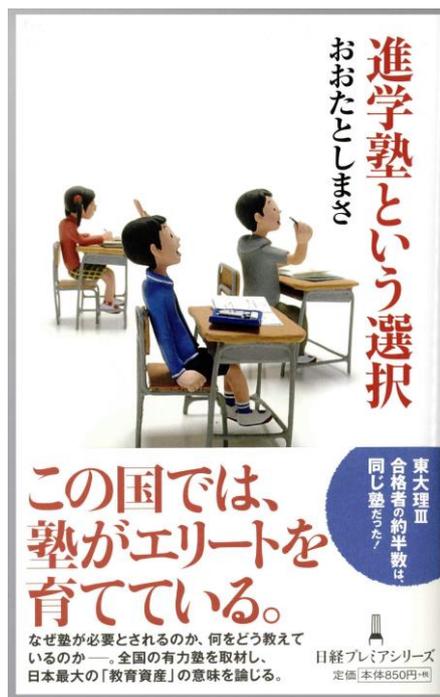
にもかかわらず、塾について研究をしている国内の学者は見当たらない。立案から6年の歳月をかけ、160人の執筆者、私を含め全国24名の編集委員、総ページ1170ページに及ぶ塾に関する歴史書として、2012年4月に発刊された『学習塾百年の歴史—塾団体五十年史』の中に、カナダ、ブリティッシュコロンビア大学の准教授ジュリアン・ディルケス先生が、その研究を寄稿されている。塾に対する国内の研究者がいない段階で、調査をされ、研究をされているディルケス先生に対し、私は塾に携わるものとして感謝し敬意を払いたい。ただ残念なことに、その冒頭に『「塾の存在は良くない事だ。しかしどうしようもない。」という言葉に揶揄されるように、未だにやや非合法で胡散臭い匂いがするのも事実である。』と訳されている部分だ。確かにこれは一部の事実かも知れないが、すべての真実ではない。35年間私は妻と二人で指導してきたが、『非合法』なことを続けてきたとは毛頭思っていないし、『胡散臭い』ことをしているとは一度も感じたことすらない。誰かが声を上げて、塾にはもっと別の側面があるのだということを世の中に知らせるべきだと考えた。『このままではやりきれない!』と感じたのだ。これが国際教育学会で『塾教育』について発表した私の動機だ。

子どもを育てるという場面は、勉強を通じてばかりではない。スポーツや音楽その他の芸術の世界においても行われている。しかし、勉強の世界では、『教』えることばかりでなく『育』てることにも心を注ぎながら指導しているのは『塾』なのだ。私たち塾に携わる者は教育の世界で社会に貢献しているという認識と責任とそして自負を持つべきだと考えている。私は塾教育の『実践者』であり『研究者』ではない。まだまだ『塾教育』というのには未知の部分が多い領域だ。大きな書店の教育関係の棚にも『塾教育』という背表紙の文字を見つけることは困難だ。私の発表を機会に国内の教育関係者により、研究がなされることを期待したい。私の実践は小さな一歩かも知れないが『千里の道も一歩より始まる』。平成11年文部省によって『塾』が社会的に認知されたように、やがて『塾教育』も『家庭教育』『学校教育』『社会教育』に次ぐ第4の『教育カテゴリー』として認知され、塾の一般的な訳語である cram school（詰め込み教室）を乗り越えて“Juku School Education”の単語が一般的に通用する日がやって来ることを願っている。

References

- 内藤潤司（編）（2013）『公益社団法人 全国学習塾協会 協会ニュース』
第 19 巻 228 号.
- 荻谷剛彦・清水睦美・藤田武志・堀健志・松田洋介・山田哲也（2008）
『杉並区立「和田中」の学校改革』岩波ブックレット No738.
- 佐藤勇治（編）（2012）『学習塾百年の歴史—塾団体五十年史』
全日本学習塾連絡会議.
- 佐藤勇治（編）（2013）『私塾・私学・企業 教育ネット要覧（第 13 集）』
全日本学習塾連絡会議.
- 下村博文（2010）『下村博文の教育立国論』河出書房新社.
- 西村和雄（編）（2003）『学力の土台』勁草書房.
- 西村和雄（編）（2001）『「本当の生きる力」を与える教育』日本経済新聞社.
- 平岡英信（2003）『人を「育てる」ということ』PHP 研究所.

今年1月24日に発刊されました『進学塾という選択』(おおたとしまさ著 日経プレミアムシリーズ)で、私の提唱している『塾教育』が取り上げられています。著者から2時間余りにわたってインタビューを受けられた調布学園の佐藤勇治先生が、国際教育学会での発表の折に配布しました『塾教育』の資料を、著者のおおたさんにお渡しになったかららしいです。佐藤先生がその本を送って下さいました。その資料の中から、『現代の塾が果たすべき社会的責任とは?』という項目で、以下のように掲載していただいています。おおた氏とは全く面識がございませんが、大変嬉しく思っています。この場でお礼申し上げます。



現代の塾が果たすべき社会的責任とは?

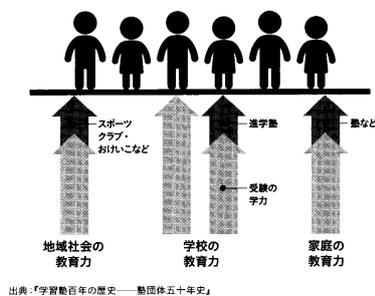
塾が上級学校へ進学するための教育機関であるとしても、塾の役割を受験のための勉強を教えることだけに限定するわけではない。「どんな手を使ってでも受験で合格させたい」という塾はむしろ少数派であり、場合によっては学校の教員以上に生徒たちとの信頼関係を深め、生徒たちの将来を案ずる塾経営者や塾講師は少なくない。

2013年6月に、塾の業界団体である全国学習塾協会が社団法人から公益社団法人に移した際、記念式典で下村文部科学大臣は、「立派な塾や私学が、勉強を教えているだけではなく、しっかりと躰やマナーやルールを教えているということは業界の中では当然のことですが、一般的には塾でそういうことを教えている方は少ない。勉強を通じて人間としての道徳教育をきちっとしていることを、公益社団法人にアピールしていただければ」と述べた。

ばと思います。あそここの塾へ行ったら規範意識、普段の行動までしっかりしてきたというように、是非ご協力いただければと思います」と述べた。

2013年9月に開催された国際教育学会第8回公開シンポジウムでは、学校と塾との連携に取り組む須原英数教室(大阪府八尾市)塾長の須原秀和氏が、「第4の教育カテゴリーとしての塾教育」という概念を発表した。かつては家庭教育、学校教育、社会教育が重なり合って機能していたが、核家族化や女性の社会進出、保護者の高学歴化などの社会現象により、3つの教育カテゴリーの連携が希薄になったと須原氏は指摘するのであ

図4 3つの現代教育のバランス



る。そして、その3つを結びつける第4の教育カテゴリーとしての役割を、塾が果たすべきであると訴えた。それが塾の社会的責任であるというのだ。

地域社会の希薄化にともない社会教育が事実上消滅し、習い事や塾がその役割を肩代わりするようになったと表現することもできると私は思う。

塾に通ってよかったこととして、塾の友だちの存在を挙げる子どもも多い。塾が学校以外の社会として、子どもの居場所になっているという捉え方もできる。

『学習塾百年史』の中で小宮山氏は、塾が現代教育、いや、子どもが暮らす社会そのものを支えていることを図4のように示している。

それほどに塾という存在は日本に欠かせない社会の一部となっている。塾は日本の文化といてもいいのではないだろうか。